



レッツボウサイ！ご近助ボランティア 大作戦！

特定非営利活動法人
防災コミュニティネットワーク

東京都台東区

取組のかたち

防災をテーマに気軽に楽しく参加できる
“ご近助”ボランティア活動を通じた
つながりづくり

届けたい人たち

多世代にわたるすべての地域住民

私たちの軌跡

防災活動をととした地域コミュニティの形成を目的に活動している。本事業に関連する活動としては、防災視点を取り入れた地域清掃活動や「非常食を日常食に！」「防災食をもっとおいしく！」をテーマに顔の見えるつながりの場をつくる防災子ども食堂などを実施している。

私たちの新たな取組

本事業はご近所でのボランティア活動を意味する「ご近助」をテーマに、孤独・孤立を感じている当事者が「地域や誰かのために」活動することを通じて、自らの孤独感を解消していくことを目的とした。具体的には、民生委員や社会福祉協議会から本事業の対象者となる方の紹介を受け、子ども食堂の運営や地域清掃などの活動へボランティアとして参画していただき、共助の意識の醸成を目指した。また、当団体の活動の参加者を対象に孤独・孤立に関するアンケート調査を実施。地域の現状を把握することで、多様な機関との連携を強化し、地域全体で課題解決に取り組む基盤の構築を目指した。

関係機関とのチームワークのつくり方

町会・自治会、民生委員、行政、社会福祉協議会、児童館、および近隣の福祉施設等と緊密な連携を意識した。特に民生委員及び社会福祉協議会は、本事業における重要なパートナーとして、毎回活動に参画していただいた。具体的には「地域で孤立している住民への本事業への参画の声掛け」や「本事業に参画したボランティアの継続的な見守り」といった役割を担っていただいている。こうした連携により、本人の困りごとや不安を早期に把握し、新たな活動場所の提案や必要な公的サービスの紹介など、個々のニーズに即した適切なサポートが可能となっている。

一人ひとりの想いが動き出す場に

地域清掃や子ども食堂等の実施にあたって、毎回ボランティアを含む全員で事前ミーティングを行い、運営フローの共有とともに参画したボランティアへのヒアリングを重ねた。企画内容や役割についての対話を通じて、一人ひとりの意見を積極的に尊重することで、受動的な「お手伝い」という意識から、「誰かの役に立ちたい」という能動的な主体性へと変容させることができた。このプロセスを通じて、彼らは単なる協力者ではなく、事業を共につくる担い手としての自覚を持つに至った。

取組の成果

本事業の成果として、孤独孤立を感じていたシニア世代4名と学生1名が子ども食堂や地域清掃などの活動の継続的なボランティアとして定着した。また、当団体の活動だけでなく、本人のニーズや状況を踏まえ、社会教育会館やフリースクール団体等の「新たなつながり先」への橋渡しも行っている。また、並行して実施した孤独・孤立に関するアンケート調査では、17件の回答のうち、約半数以上が「何らかの形で孤独・孤立を感じている」という実態が浮き彫りになっている。今後も調査を継続しながら、住民のサポート体制の拡充を目指していきたい。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人防災コミュニティネットワーク
代表者	理事長 増村一樹
設立年月	2018年7月
住所	東京都練馬区大泉学園町6-20-32
ホームページ	https://bosaicn.net/
メッセージ	レッツボウサイ！を合言葉に、誰でも参加のしやすい防災プログラムを提供し、孤独・孤立をはじめとする地域課題の解決を目指しています。

取組の様子





取組のかたち

居場所づくり、中高生の社会参画、多世代交流

届けたい人たち

ギフテッド傾向の生きづらさや
孤立・孤独を抱える中高生

私たちの軌跡

当団体は2007年の設立以来、被災地支援活動、不登校支援や学習支援を通じ、子どもたちの多様な居場所づくりに取り組んできた。その中で、高い知的好奇心を持ちながらも、周囲との違いから学校や地域で「浮きこぼれ」となり、深刻な孤独・孤立状態に陥っているギフテッド傾向の中高生の存在が浮き彫りになった。既存の支援では彼らの特性に応じきれず、精神的に追い詰められるケースも多いことから、彼らに特化した対面型のつながりの場が必要であると確信し、本事業の展開に至った。

私たちの新たな取組

本事業では、学校生活に馴染みづらさ、孤独・孤立感を抱えるギフテッド傾向の高校生を「インターン」として採用し、東京都渋谷区(代々木)の対面の居場所「spark(スパーク)」の運営に参画してもらう取り組みを行っている。ギフテッド傾向のある子どもたちは、ただ支援を受けるだけでなく、自分自身も支援を一緒に考える主体となることで、本当の意味での成長につながると私たちは考えた。大学生メンターや社会人スタッフの伴走のもと、インターン生たちが自分たちの手でイベントを企画・実施し、また、居場所運営に必要なツールの開発まで担うことで、利用者であると同時に「支援の担い手」として社会参画を実現している。

成功のカギとなった工夫とひらめき

居場所の開設時から、インターン生には利用者と一緒に遊んでもらい、大学生以上のスタッフだけでは難しい「打ち解けやすい空気」をつくってもらった。年齢の近い先輩が好きなことを共有し合う「ナナメの関係」で接することで、利用者の心理的安全性を確保できた。また、Discordの設計・開発では、インターン生が中高生目線での機能要望とスタッフ目線での安全性設計を両立させ、それをプログラム実装まで担当してくれた。QRコードを用いた参加証も、利用者目線で使いやすく仕上げたり、イベントも毎月1~2回、インターン生の「やりたい」気持ちをもとに定期開催を実現した。

素の自分でいられる心地よさ

不登校を経験しているインターンの高校生は、自身の経験を後輩たちに伝え、運営に主体的に関わることで、「選ぶことに意味がある」「自分の意志で決めることが大切」という気づきを得て、自己肯定感を再構築していった。Discordの開発やイベント企画など、自分の強みを活かして他者に貢献できた経験が自信につながっている。居場所を利用した中高生からも、「学校以外に安心して通える場所ができた」「一人ではないと感じられた」といった声が寄せられており、年齢の近いインターン生の存在が「自分もこうなれるかもしれない」という前向きなイメージにつながっているようだ。

取組の成果

本事業を通じ、高校生インターン制度において以下の成果を得た。
インターン生は目標の2名を採用し、受験期等を除き毎月活動を継続した。「当事者に近い存在」として利用者と一緒に遊ぶことで、大学生以上のスタッフだけでは築けなかった信頼関係を構築できた。その結果、12月の月間居場所訪問者数は目標60名を上回る71名を達成した。事業終了時には、気持ちが前向きになった人の割合がインターン生100%、継続利用者88%と、いずれも目標の80%を超えた。
今後は、「当事者が支援の担い手となる」居場所づくりの知見を体系化し、地域の相談窓口等との連携強化により、官民連携モデルの構築を目指していく。

団体概要

団体名	NPO法人 日本教育再興連盟(ROJE)
代表者	陰山 英男
設立年月	2007年2月
住所	東京都渋谷区代々木5-62-1
ホームページ	https://kyouikusaikou.jp/
メッセージ	教育で未来をつくる。学生と社会人が、立場や年齢を超えてつながり、子ども・教員・保護者が抱える課題の解決と価値の創造に挑み続けます。

取組の様子



哲学カフェ



spark Fes 0



クリエイティブ遠足:デザインあ展neo



こども食堂を活用した「孤立しやすい」住民の地域参加モデル開発

認定NPO法人
全国こども食堂支援センター・
むすびえ

東京都渋谷区、千葉県
佐倉市

取組のかたち

対象者自身が参加してみたい！と思える
テーマ・コンテンツの開発、関係者との協働
食とこども食堂を通じた地域のつながりづくり

届けたい人たち

子育て中のワーキングママ
60歳以上のシニアの男性

私たちの軌跡

むすびえは、「こども食堂の支援を通じて誰も取りこぼさない社会をつくる」をビジョンに掲げて活動している。各地のこども食堂ネットワークを支援する地域ネットワーク支援事業、こども食堂支援を行う企業、団体との協働事業、こども食堂の実態を調査研究し、広報・啓発する事業などを行っている。2025年度の弊団体調査で全国のこども食堂の箇所数は、1.2万箇所を超え、多世代交流の地域の居場所となりつつあるが、実際に利用したことがある方はまだまだ限られている。もっとたくさんの人にこども食堂の活動に触れてもらいたい。地域の未来をつくる活動に参加してほしいとの思いをもって活動している。

私たちの新たな取組

「子育て中のワーキングマザー」と「60歳以上のシニア男性」を対象にこども食堂との接点づくりを試みた。前者は仕事と育児で忙しく、後者は料理や歓談に不慣れな傾向があり、いずれもこども食堂から距離を置いている。本取組では、対象者が自発的に参加したくなるイベントを企画し、その実践の場にこども食堂を組み込むことで「気がつけば活動の一部を担っていた」という自然な参画を目指した。具体的には、ワーキングマザー向けに①「地域でつながる“手前みそ”プロジェクトin渋谷区こども食堂」を、シニア男性向けに②「男・本気のスパイスカレー教室in佐倉市こども食堂」を実施した。

地域デビューのきっかけ

①“手前みそ”プロジェクトは、こども食堂を会場に味噌づくりを実施。子どもと参加したいという親子連れが集まった。仕込み・発酵・調理まで、複数回のワークショップを通して、参加者同士だけではなく、こども食堂の利用者とのつながりが生まれた。②男・本気のスパイスカレー教室は、ハウス食品グループのスパイスマスターの指導の下、シニアの男性たちがスパイスの由来や配合方法などを学び、試行錯誤しながらカレー作りに挑んだ。作ったカレーをこども食堂で披露した。磨いた腕前を、こどもたちの前でお披露目することで、スパイスカレーだけでなくこども食堂と地域活動への関心を高める機会となった。

関係機関とのチームワークのつくり方

①「みその魅力を広げたい」という想いのもと、メーカー、業界組合、こども食堂の三者が協働して1年間のプログラムを実施した。マルコメからは最初の味噌仕込みキットと講師を、全国味噌工業協同組合連合会からは多種多様な味噌、講師、レシピ集を、こども食堂からはプログラムの実施主体として全面的な協力をいただいた。②シニア男性の孤立予防というテーマに共感いただき、各々がリソースを持ち寄って協働した。ハウス食品グループからは、指南役のスパイスマスター・スペシャルレシピ・スパイスを、佐倉市社会福祉協議会からは、市の広報誌による集客、こども食堂とのマッチング、会場との調整など事務局を担っていただいた。

取組の成果

①“手前みそ”プロジェクトの参加者を対象としたアンケートでは、60%が「地域に知り合いや友人ができた」、50%が「ワークショップに参加して、子育ての不安や孤立感が減った」、100%が「こども食堂や知り合った地域の方と継続的に関わりたい」と回答し、孤立解消や地域とのつながりづくりに寄与することができた。一方で、継続実施には物資やコンテンツ面での企業協力が重要。スケール化には課題が残っている。

②男・本気のスパイスカレー教室の参加者を対象としたアンケートでは、教室が対象者自身が参加したいコンテンツとして有効であることを検証。プログラム満足度、調理継続意向は100%、こども食堂への関心度も90%を超え、参加者の意識変容ができた。一方で、その後の地域活動への参加といった行動変容にはフォローアップが必要であることが課題。フォローアップのため、地域社協などとの連携強化を図っていく。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人全国こども食堂支援センター・むすびえ
代表者	三島 理恵
設立年月	2018年9月3日
住所	東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-5 リンクスクエア新宿16F
ホームページ	https://musubie.org/
メッセージ	「こども食堂の支援を通じて誰も取りこぼさない社会をつくる」をビジョンに、全国のこども食堂を応援している団体です！

取組の様子





取組のかたち

孤独・孤立状態にある中高生と早期につながるデジタル機器を活用した居場所づくり

届けたい人たち

経済困窮や不登校など、様々な困難を抱える中高生

私たちの軌跡

無料のデジタル教育・キャリア教育、居場所支援、就労体験の機会を提供し、中高生の将来的な自立と自走を支援している。また、デジタル機器に自由に触れられる居場所を大阪および東京で運営し、安心して過ごせる環境も整備している。高校生向けには、PC・教材・交通費を無償で提供し、ITスキルやキャリアについて3カ月間学ぶ「Tech Runway」プログラムや、企業から受けた案件の一部を報酬を得ながら実践する機会を得る「クエスト」事業を展開している。これらの活動を通じて、「生まれ育った環境に関係なく、子どもが将来に希望とワクワクを持てる社会」の実現を目指している。

私たちの新たな取組

2025年2月に開所した、デジタル機器を活用した居場所「テクリエさぎのみや」を、孤独・孤立状態にある中高生と早期につながる地域包括支援拠点へと発展させる。居場所を運営する大学生メンターの育成のほか、行政・教育機関との連携や地域の大人とつながるイベントを実施。これらを通じて、中高生たちとの信頼関係を構築し、孤独・孤立の芽を早期に察知することとともに、地域社会との日常的な接点を創出する。これにより、早期対策と継続的支援を地域全体で実現する包括的支援拠点を目指す。

つながりを力に一連携の工夫

行政・教育機関や地域の団体との関係を構築するため、イベントへの出展を1件、視察の受け入れを20件実施。そのほか、こども家庭庁、東京都、中野区、教育委員会、ユースソーシャルワーカー等への情報共有に加え、イベント開催時等の外部公開の機会を通じて、対象となる中高生の来訪や紹介につながる接点を創出した。また、不登校の中高生の居場所への参加の心理的ハードルを踏まえ、ソーシャルワーカーや保護者の同行、オンライン館内ツアーの実施など、段階的に関わりを深めていく導線を整備した。さらに、大学生メンターを育成し、日常的な関わりを担える体制を整えたことで、連携が一過性に終わらないようにした。

取組の成果

取組を通じて、行政・教育機関・地域団体計19機関と連携することができ、困難を抱える中高生と早期につながる関係性を築くことができた。また、大学生メンターの育成や多様なイベントを通じて、中高生が安心して過ごせる居場所としての機能も定着しつつあり、延べ来訪者数も1月時点で1,076人となった。さらに、地域の大人や企業、大学院生との交流機会を創出し、地域包括支援拠点としての役割を担い始めている。今後は、連携機関との情報交換を強化し、早期発見から継続支援までの仕組みを安定的に運用し、地域とつながる支援モデルとして発展させていく。

団体概要

団体名	認定NPO法人 CLACK
代表者	平井大輝
設立年月	2018年6月
住所	東京都中野区鷺宮3丁目19-7
ホームページ	https://clack.ne.jp/
メッセージ	逆境を乗り越える力をCLACKで身につけた、さまざまな困難を抱える高校生が、次の世代のロールモデルとなる。希望の循環を生み出し、生まれ育った環境に関係なく、子どもが希望とワクワクを持てる社会を実現していきます。

取組の様子

あなたが通った屋台は…

- ① 射的 : 点數に応じてお菓子をゲット!
- ② 食べ物 : かき氷などの定番屋台!
- ③ ガチャガチャ : スタンラリーもあるよ
- ④ 魚釣り : 釣った魚に応じてお菓子をゲット!
- ⑤ みんなの合作・展示 : テクリエってなんだろう?

テクリエさぎのみやまつり

場所 東京都中野区鷺宮 3-19-7
テクリエさぎのみや

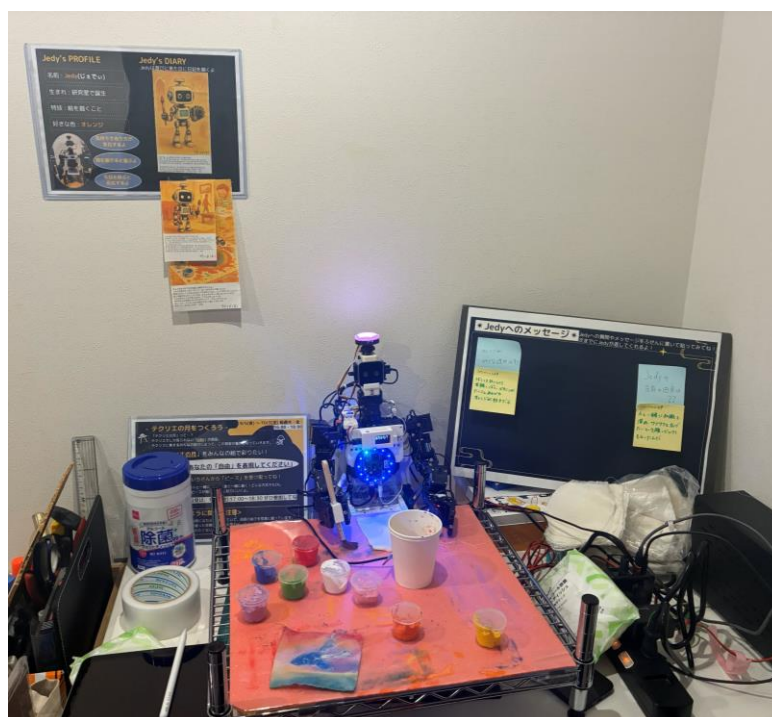
日時 8月19日(火) 14:00~19:00

参加者 子ども・大学生・保護者・その他ご関係者

普段は大人は入れないけど、この日は特別に入れるよ!

入退場自由!参加無料!

ぜひ来てね!!





困難を抱える若者を対象とした炊き出し 「ヤングホームレス食堂」

特定非営利活動法人
サンカクシャ

東京都豊島区

取組のかたち

食を通じたつながりづくり

届けたい人たち

15歳から20代までの
困難を抱えている若者たち

私たちの軌跡

15歳から25歳くらいまでの、家族や身近な大人を頼れない若者に対してアウトリーチ活動を行い、「居場所」「仕事」「住まい」の3つの軸を中心にサポートをしている。居場所は週4日間、主に14時から21時まで開放して、安心していただける場を提供している。住まいのサポートでは、ホームレス状態の若者や家出をしてネットカフェ生活をしている若者に対してシェアハウスやシェルターを提供し、基本的な生活のスキルを身に付けられるようサポートもしている。仕事のサポートでは、“失敗してもいい就労体験”として、地域の方や企業からいただいた仕事を若者に提供している。

私たちの新たな取組

居場所や住まいを失う若者が近年増加している。そうした若者の多くが生活に困窮し、ご飯を食べることもままならない状態にある。そこで本事業では、住まいを失った若者へのアウトリーチ活動も兼ねて週に1回程度、若者に無料で食事の提供を行う「よりみちごはん」を開設した。「よりみちごはん」で繋がった若者に対しては、当日の食事だけでなく継続的な食糧支援も行うこととした。また、生活や住まい、仕事の相談対応も行い、必要に応じて他団体や公的支援に繋ぐ支援を展開した。

悩みながら見つけた前進のヒント

本事業の発足当時、ホームレス状態の若者と繋がる場を、「ヤングホームレス食堂」という名前で毎週土曜日の13時から15時に開催していた。しかし、あまり多くの若者と繋がることはできなかった。若者や炊き出しを実際に行っている支援者へのヒアリングを重ねていったところ、“ホームレス”という言葉に抵抗を持っている若者が多いこと、土曜日は炊き出しが多く地域で行われていることがわかってきた。そこで、12月に「よりみちごはん」と名称を変更し、開催の時間帯も毎週金曜日の夜間帯へと変更した。まだ変更して間もないが、変更後に新たな若者たちと繋がることができており、良い手ごたえを得ている。

取組の成果

本事業では、これまでサンカクシャの存在を知らなかった複数の若者と繋がることができた。その多くが、困窮を背景に「なんとか食費を浮かせたい」と考え、食事を抜いてしまっている若者であった。一緒に食事を摂る中で、若者から孤独を抱えていることが伝わる相談を受けることもあり、従来の炊き出しでは中々埋めることのできない細やかな繋がりを作ることができた。今後はこの食堂の認知度を高めていけるよう広報活動にも力を入れ、より多くの若者と繋がっていきたい。また、法人スタッフだけで運営を行うのではなく、地域の方や企業の方のボランティアも募っていく。

団体概要

団体名	NPO法人 サンカクシャ
代表者	荒井 佑介
設立年月	2019年5月
住所	東京都豊島区上池袋4-35-12-3階
ホームページ	https://www.sankakusha.or.jp/
メッセージ	15歳から25歳くらいまでの親や身近な大人を頼れない若者に「居場所」「仕事」「住まい」の支援を通してサポートしています。

取組の様子





取組のかたち

オンラインとリアル融合による居場所づくり

届けたい人たち

移民などの多様なバックボーンにより
仲間を作りづらいママ・パパ

私たちの軌跡

RMJは、東京都葛飾区を拠点に、多文化なママ・パパが安心して集い、リラックスしながら子育てについて語り合うコミュニティを運営。親子向けイベントを通じて、保護者同士が自然につながれる場を提供している。また、海外ルーツのある保護者が地域や行政と出会い、身近な制度や支援を知るきっかけをつくることも、RMJの大切な役割である。支援する・されるという関係にとどまらず、一人ひとりが地域の住民として参加する。行政や地域団体と協働しながら、子育て世代が地域活動に参加しやすい仕組みづくりにも取り組み、「このまちに住んでいてよかった」と感じられる日常を広げることを目指す。

私たちの新たな取組

オンライン子育て支援センターでは、LINEで育児の悩みを気軽に相談でき、専門家のサポートを通じてストレス軽減と交流への一歩を後押し。オンラインコミュニティ(Discord)では、地域を越えて日常的に支え合える関係を育む。孤立解消音楽イベントでは、音楽をきっかけにオフラインでの出会いと新しいつながりを生み出す。学習機会提供ツアーでは、親子参加型の食などの体験を通じて親同士の交流を促し、地域や企業との接点を広げる。実験的リアルイベントでは、「日本語の通じないマルシェ」などを企画し、移民の立場を可視化するとともに、相互理解と主体的な社会参加を促進する。

現場での実践を通じて

これまでは、日本語・英語が得意でないママ・パパが輪に入りにくい場面があった。しかし本取組では、日本語や英語が得意でなくても、自分の「母語」や「ヒジャブ」(衣服)などの文化的背景そのものに焦点を当てた。結果、「自分は役に立つことが何もない」と思い込み自信を失っていた人々が、自らの役割を見出し、いきいきとした表情で他の参加者と交流する姿が見られた。さらに、有償ボランティアとして参加を募ることで、イベント参加に対する家族の理解も得やすかった。本取組を通じて、移民ママ・パパたちが地域社会に貢献していくことは、共生社会の実現において不可欠であると改めて実感した。

取組の成果

LINE相談からイベントへの参加につながることもあり、オンラインとオフラインの融合が実現した。音楽イベントでは、昨年なかったパパの参加があった。「日本語の通じないマルシェ」では、移民が自分の母語で接客、参加者はひらがなの読みを使ってその言葉を体験した。言葉が通じにくい環境で買い物をする困難さを体感し、理解を深める時間となった。接客を担当した移民に謝礼を支払うことで、ふだんイベント参加に家族の理解を得にくいママも、役割を持って安心して参加できた。葛飾区文化国際課からの協働依頼もあり、今後は行政と連携し、より多くのママ・パパの孤立にリーチしていく。

団体概要

団体名	RMJ
代表者	室井萌
設立年月	2022年3月
住所	東京都葛飾区
ホームページ	https://rmjtokyo.org/
メッセージ	団体名は「日本に住む全てのママ・パパにとってリラックスできる場所」を英語にしたものの略称です。人種だけでなく、世代のちがいなど、世の中にあるさまざまな「壁」をなくし、やさしくリラックスできる社会をつくりたいと思う人たちが集まり、活動を続けています！

取組の様子



葛飾区子育てネットワーク主催
「子ども子育てフェスタ」に参加



ボードを使い、ベンガル語、キニアルワンダ語など移民の母語を体験



葛飾区社会福祉協議会主催
「ボランティアまつり」に参加



葛飾区文化国際課
「かつしか国際交流まつり」合唱参加



RMJ主催で地域向けに行った
「日本語の通じないマルシェ」イベント
過去最多の11カ国の海外ルーツを持つ親子、
自治会長など地域の参加者含め約60名が参加



ヒジャブ体験&各国のおやつ交換会では
地域の高齢者やUR職員もヒジャブを体験



取組のかたち

当事者のためのポータルサイト構築
安心できる居場所づくり

届けたい人たち

ACEサバイバー、
親や身近な大人を頼れない若者、
多世代

私たちの軌跡

2022年から子ども期に虐待や逆境を経験してきた人たち(ACEサバイバー)を対象に相談対応・同行支援・居場所づくりといった活動を実施。また、ACEサバイバーへのサポート体制の整備を目指して、調査や政策提言・啓発活動も行っている。
ACEサバイバー当事者の声を聞きながら、当事者の方も支援にあたるスタッフもともに安心を感じられる関りを作っていくことを大切にしている。

私たちの新たな取組

今回2つの取組みを行った。
①ACEサバイバーに必要な支援や制度の情報は多岐に亘っており、必要な情報に辿り着けない問題を解決するため、当団体のHPに新規ページを設けて専用のポータルサイトを開設。その設計にあたっては、当事者へのアンケート調査等を行い、「当事者の声」を重視した。
②現在運営している居場所(おならカフェ)をさらに安心安全な場とするため、スタッフやボランティア等を対象にトラウマインフォームドケア(トラウマ体験を理解し、その影響を考慮した支援)の研修を実施した。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

ACEサバイバーは、人との関わりに不安を抱えやすく、孤独孤立に陥りやすい状況にある。しかし、各種支援や制度に関する情報は分散しており、必要な情報にアクセスできないという課題がある。「必要な人に、必要な情報をきちんと届けたい」という思いから、ACEサバイバーのための情報を一元化する取組が始まった。また、こうしたACEサバイバーの方たちが人との関りの中で安心を実感できる居場所も重要である。そうした居場所を目指し、運営するスタッフが利用者一人ひとりの背景に目を向けた関りができるよう学ぶ必要があると考え、取組を実施した。

“ここがポイント！”現場発の知恵

ポータルサイトの構築にあたっては、「当事者の声を大切にする」ことを、何よりも重視した。当事者851人へのアンケート調査を実施し、設問内容や選択肢の設計の段階から当事者の意見を反映させ、丁寧に調査を実施した。さらに当事者による座談会を開催し、「どんな入り口があれば、つながってみようと思えるか？」をテーマに意見を集めた。
トラウマインフォームドケア研修は、ACEサバイバーが安心を感じられた実際の事例を共有し、現場での実践につながる内容となるよう研修内容を工夫して実施した。

取組の成果

ポータルサイトの構築については、当事者からは「そもそもACEサバイバーである自覚がなかった」という声が多くあった。そのため、サイトを訪れた方がACEスコア判定の実施や当事者の体験談を読むことを通じて、自身がACEサバイバーであると自覚できる構成とした。結果、サイト公開から14日で920人が訪問、242人がACEスコア判定を実施した。サイト利用者からは「大切に扱われていると感じた」という声も寄せられており、当事者の声を反映した設計や言葉遣い等が安心感につながったと考えている。今後は支援情報の充実に努めていきたい。トラウマインフォームドケア研修には、運営スタッフ、ボランティア等、計74名が受講した。研修後、「参加者に対する眼差しが変わった」「以前より力を抜けるようになった」という声が寄せられた。おならカフェ利用者は延べ685人となり、トラウマに配慮した安心な場作りが継続的な利用につながった。

団体概要

団体名	一般社団法人Onara
代表者	丘咲 つぐみ
設立年月	2022年3月
住所	東京都江戸川区西小岩1-20-15 M・A101号室
ホームページ	https://onara.tokyo
メッセージ	困難な状況にある人が助けを求めたり、支援を頼ることは、決して簡単なことではありません。だからこそ、その一歩を踏み出した勇気に最大限の敬意を払います。孤独孤立の背景には、トラウマとなる体験が重なっていることも多く、支援機関だけでなく、地域や社会全体でトラウマインフォームドな関りが当たり前になる根づく社会を目指して、取り組んでいきます！

取組の様子



あしたのヒント

エピソード ACEとは? 助けになる情報

あしたのヒントとは?

生きづらさを抱えながら生きていくと、「なぜ自分ばかりに、苦しいことが繰り返されるのだろう」そんな思いを抱えながら、自分を責めてしまったり、「何をしても変わらない」と感じる時間を、長く過ごしてきた方もいるかもしれません。

また、自分の生きづらさの背景に何があるのかを知っていても、そこからの歩みが思うように進まず、もどかしさを感じながら過ごしている方もいると思います。

どちらであっても、このサイトにたどり着いてくれたこと、そして、ここまで一杯生き

ACEサバイバーポータルサイト



ポータルサイト開設に向けた座談会の様子



おならカフェスタッフ



おならカフェの様子



世代間交流を通して、地域みんなが つながる

社会福祉法人
江東園

東京都江戸川区

取組のかたち

孤独・孤立を防ぐための世代間交流
地域とのつながりを再構築

届けたい人たち

「つながりたい」と願っているのに、
望む人間関係が築けない、役割を持ちたい
と感じている高齢者

私たちの軌跡

当法人は江東区にて、高齢・障害・保育の各分野にわたる幅広い福祉サービスを展開している。江戸川保育所と同一の建物内に、特別養護老人ホームや障害者の生活訓練事業所などを併設し、多様な利用者と職員が寄り添い合う「大家族」のような運営にこだわっている。こうした当法人の特徴を活かし、園児、高齢者、障害者の方々が、合同行事や日々の生活を通じて、日常的に交流を図る、世代を超えた共生社会を実践している。

私たちの新たな取組

当法人の施設を利用する園児・高齢者・障害者を中心とした多世代交流の枠組みを広げ、地域の住民が参画できる機会を新たに創設する。具体的には、江戸川保育所において実施する「朝のラジオ体操」に地域の高齢者を招待。対象者の選定にあたっては、当法人が事務局を務めるボランティア団体「江戸川見守り隊」の活動を通じて、社会的孤立が懸念される高齢者の方々を対象に声掛けを行う。子どもたちとの交流から、活気や自身の役割を見出すことで、孤独・孤立の予防につなげていく。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

現代社会では核家族化、地域コミュニティの希薄化が進み、地域住民が抱える孤独感・孤立感は公衆衛生の課題となっている。慢性的な孤独感は、個人の精神的な不安定さを招くだけでなく、地域における相互扶助の機能を弱体化させ、社会全体の脆弱性につながっていく。こうした事態を防ぐため、当法人が継続してきた世代間交流の経験から、朝のラジオ体操に地域で孤独を抱える方々を巻き込んでいく事を考えた。顔なじみの関係を築くことで、閉じこもりの防止や安心できる居場所や世代を超えたつながりが構築できると確信している。

成功のカギとなった工夫とひらめき

事業の実施にあたっては、当法人の既存事業や人材を活かした。対象者の選定にあたっては、当法人が事務局を務めるボランティア団体「江戸川みまもり隊」の協力を得て、近隣住民の単身世帯・老老世帯の約600世帯から対象となりそうな高齢者を抽出。その後、高齢、障害、保育の各分野の専門職で構成されたプロジェクトチームが戸別訪問によるアセスメントを実施し、結果として11名を対象者とした。また、保育園側の協力もあり、ラジオ体操の開催の前に、対象者を保育園の運動会の予行演習に招き、会場の雰囲気を見てもらった。

取組の成果

対象者のうち5名が継続的に参加した。参加者からは、「孤独感がなくなったよ」「朝きちんと起きられる」「夜眠れる」「子供が孫みたいで可愛い」等の声が聞かれた。取組を通じて、職員や園児との顔見知りの関係になり、オープン保育やクリスマスお遊戯会の予行演習へも参加し、交流の機会が拡大した。取組前後で実施したアンケートでは、孤独感の数値の上昇がみられた方がいたが、個別に確認したところ、交流の時間が充実していたため、1人になると寂しさが増したとのことだった。孤独を解消するための居場所は構築できつつあるため、今後は参加の継続や一歩進んだ交流の機会を作っていく必要があると考える。

団体概要

団体名	社会福祉法人 江東園
代表者	嶋田 拓治
設立年月	1962年10月
住所	東京都江戸川区江戸川1-11-3
ホームページ	https://www.kotoen.or.jp/
メッセージ	地域社会とともに大きく育つ大家族！お年寄り・子供・ハンディキャップの持つ方々みんなと一緒に笑顔で過ごせる「共生社会」をつくるために。

取組の様子





取組のかたち

農業を通じた繋がり・支援のネットワークづくり

届けたい人たち

生活困窮者
若者(10代~20代の学生)

私たちの軌跡

2006年の結成(2007年設立)以来、POSSEでは若者の労働・貧困問題への取り組みにはじまり、これまで社会的に弱い立場に置かれた外国人労働者・女性・若者から、年間3000件を超える労働・生活相談を受けてきた。一つひとつの相談を解決するのはもちろん、調査・学習活動を積極的におこない、現場から得られた知見をもとに政策提言・社会発信をしてきた。コロナ禍以降は、物価高騰を背景として困窮状態に陥った方々の相談・支援活動に注力してきた。

私たちの新たな取組

東京都八王子市内の畑を借り、高校生から大学院生までの学生ボランティアがジャガイモや人参、オクラなどの栽培に取り組んだ。収穫後は、フードパントリー(食料配布・相談会)を開催し、生活困窮者の方へ直接届けた。種まきや植え付けから収穫、配布に至るプロセスを一貫して学生自身が担う点が本事業の特徴である。また、市内の「だれでも食堂」や「子ども食堂」へ収穫物を提供することで、地域で活動する団体とのネットワークの構築も実現した。

共に進む仲間を作るための工夫

当団体の労働・生活相談活動では、法律や制度の専門知識を要する場面が多く、学生ボランティアにとって参加への心理的ハードルが高いことが課題だった。そこで本事業では、相談活動の一環に「農作物の栽培、配布」を組み込んだ。あわせて定期的な学習会も開催し、支援方法について学ぶ機会を設けた。農作業や学習会を通じて接点を増やすことで、学生が忙しく、流動性が高い東京において、メンバー間の結束を強め、活動への定着を図った。

取組の成果

「自分たちの手で畑を耕し、支援をする」というアイデアによって、学生がボランティアに参加する際の心理的ハードルを緩和でき、参加者からは「体を動かすのなら自分でもできると思った」といった声が寄せられている。また、農作業という共同作業を通じて、メンバー間の結束を深めることで、約半年間の活動期間のうち、約65%の方が継続的に参加するという高い定着率(当団体他事業は40%ほど)が実現できた。今後は、学生ボランティアに留まらず、当団体が支援をする過労死遺族や移住労働者といった多様な方々が交流・結節する場として、この農地プロジェクトを発展させていく。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人 POSSE
代表者	岩本 菜々
設立年月	2007年3月16日
住所	東京都武蔵野市吉祥寺本町1-33-6 木下ビル 3階
ホームページ	https://npoposse.jp/
メッセージ	POSSEは労働・貧困問題に関する様々な問題に取り組むNPO法人です

取組の様子





不登校親子への居場所の提供と子ども若者成長支援事業

特定非営利活動法人
育て上げネット

東京都立川市、八王子市

取組のかたち

居場所づくり、就労体験、学習、遊び支援
専門相談、官民連携プラットフォーム

届けたい人たち

不登校の児童生徒、その保護者、
支援者を目指す若者、地域住民

私たちの軌跡

「すべての若者が社会に居場所を見つけ、働ける社会」を目指し、長年、若者の就労支援や社会参画のサポート、およびその保護者への相談支援を行っている。本事業でも、単なる支援の提供にとどまらず、当事者が「自分の経験を活かしたい」と思えるような、伴走型の支援を大切にしました。

私たちの新たな取組

不登校の子どもとその保護者が共に過ごせる「ボードゲーム・カードゲームカフェ」を運営した。学校以外の安心できる居場所を提供するとともに、支援者を志す若者(若者サポーター)が運営を担うことで、彼らにとっての就労体験の場も創出した。また、専門の相談員による無料相談も実施し、多角的に親子を支えていた。

共に進む仲間を作るための工夫

地域の教育機関や行政、社会福祉協議会と密に連携し、単なる周知にとどまらず、学校内でのカフェ実施や専門的な助言を組み込むなど、関係者の強みをいかした協働を進めている。子ども若者支援の専門家からは月例で運営改善の助言を受け、学校支援の専門機関とは「ボードゲーム・カードゲームカフェ」を高尾山学園で開催する際の動線・滞在時間を調整した。さらに、ゲーム運営の専門人材が進行を担い、初参加者も安心できる環境を整えた。

取組の成果

ボードゲームを共通言語に、不登校の子ども、保護者、若者サポーターの三者に成長をもたらした点が成果である。子どもは「ここなら行きたい」と自発的な外出意欲を回復し、カフェが始まる前に来場するという行動変化が生じた。保護者は誘い方の悩みが解消し、対話再開の糸口を得ることができた。若者サポーターは入口でためらう親子へ主体的に声をかけるなど積極性が芽生えた。結果として、地域では「待望の居場所」として定着しつつあり、支援の受け手が次の支援者へと循環する基盤が形成された。今後は拠点間連携を強化し、参加機会と担い手育成を拡充する。今年度実績:開催4回 参加者数93人(含若者サポーター)

団体概要

団体名	特定非営利活動法人育て上げネット
代表者	工藤 啓
設立年月	2004年5月
住所	東京都立川市高松町2丁目9-22 生活館ビル 1階
ホームページ	https://www.sodateage.net/
メッセージ	若者もまた、私たちの社会を構成するひとりです。若者が望まない孤立を経験しないようにするには、当事者の若者を支え社会とつなぐことはもちろん、社会の側が認識を変えて、若者を見捨てずにつながりを作ることも重要です。私たちは若者とともに進む社会を見据え活動しています。

取組の様子

予約 不参加 参加 無料 出入 自由

親子で楽しむ ボードゲーム カフェ

70種類以上!
ポケモンカード
持ち込みOK!

2026. 1. 12 月・祝 13:30 ~ 16:00

場所 育て上げネット1階 (立川市高松町2-9-22)

対象 小学生~20代の方と保護者
(子どもだけ/親だけOK)

あなたと家族のアドバイザー 結
☎042-527-6051
(9:00-18:00/日祝休み)





若者主体のコミュニティカフェを 拠点とした地域のつながり作り

特定非営利活動法人
青少年自立援助センター

東京都八王子市、福
生市

取組のかたち

居場所・交流の場づくり

届けたい人たち

多世代(主に若者・高齢者)

私たちの軌跡

不登校やひきこもり状態を経験、または継続している青少年や、海外ルーツなど社会的に弱い立場にあるために、自立が困難または今後困難になると予想される青少年に対し、就労に向けた準備や学習支援活動等の機会の提供、関係諸機関等との連携や伴走支援を通して、状況の緩和およびそこから脱却し、各人の個性に応じた自立への機会獲得に寄与する活動を行っている。

私たちの新たな取組

様々な困難を抱えて孤立しがちな若者が主体となり、コミュニティカフェの運営、地域住民の御用聞き等の地域活動を行うことによる社会参加の機会を提供する。また、世代や属性を問わず多様な主体が多様な立場で協働することにより、相互理解の機会を得て多様性を認め合うことができる取組となり、地域というフィールドを居場所と位置づけることができるモデルを形成する。

地域に吹く新しい風

ふれあい喫茶はち福：誰もが気軽に立ち寄れる、多世代交流を目的とするコンセプトカフェ。若者と自治会が協力してコーヒーを淹れ住人に提供したり、一緒にコーヒーを飲みながら会話をし、交流を図った。さらに、住人の方々に観たい映画のアンケートを行い、映画鑑賞会を実施した。一人ではなく、多様な人とその場を共有できる居場所として機能している。

花壇整備活動：自治会が管理している花壇の花の植え替え作業や水やりを行った。また、若者と地域住民が協力してクリスマスツリーの飾り付けをしたり、意見を出し合って看板作りをし花壇に設置した。

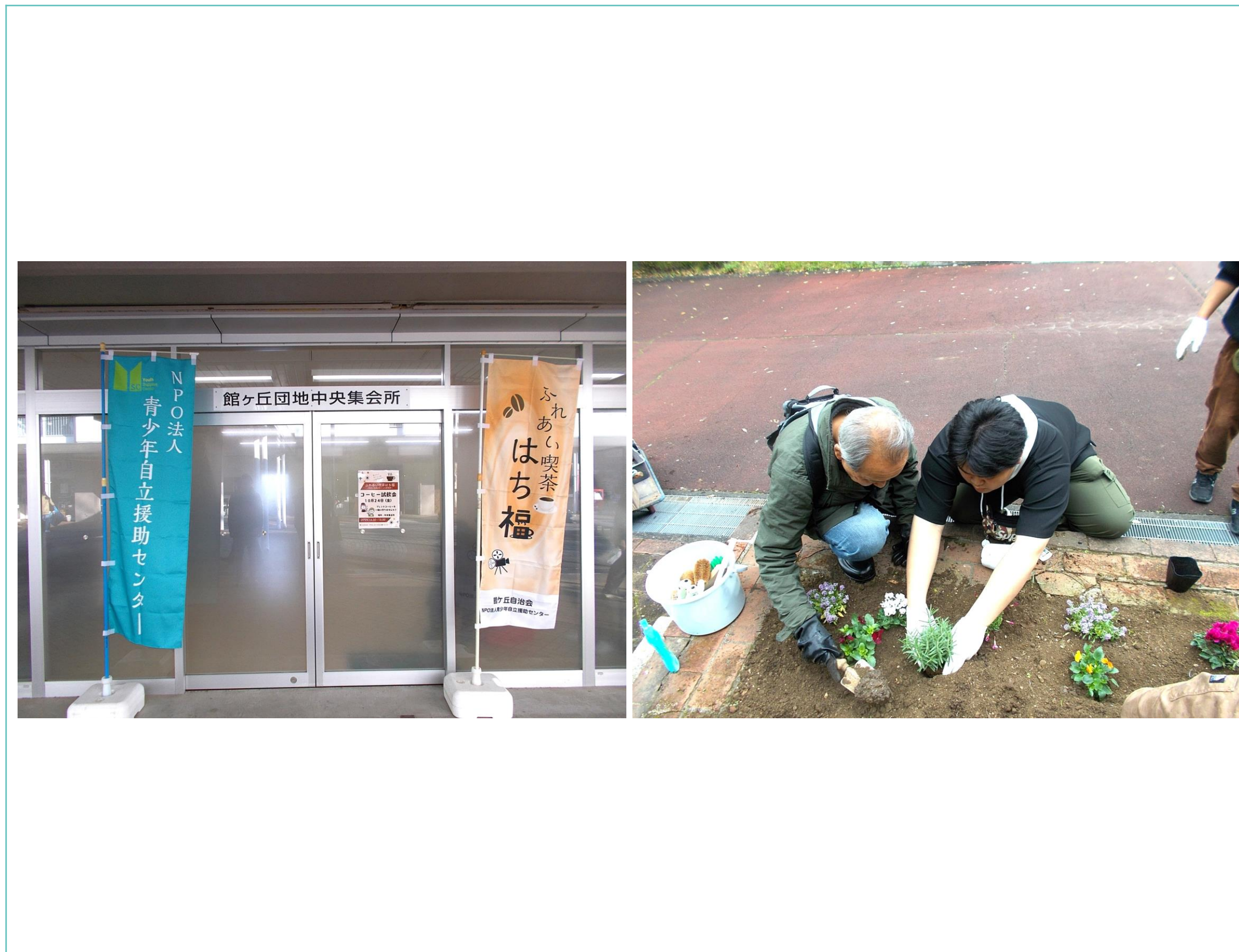
取組の成果

ふれあい喫茶はち福：全7回開催、延べ若者31名・地域住民88名が参加。困難を抱える若者が参加してもいいんだと思える活動となり、多世代との交流を通して若者が楽しさや居心地の良さを感じられる居場所となった。さらに、地域住民にとってもコミュニティを形成する居場所となり孤独・孤立対策にも繋がった。花壇整備活動：全14回開催、延べ若者43名・地域住人86名が参加。活動の認知度が広がった事で自治会の活動参加者が5名と増え、新たに行政や他機関とも連携した活動が加わり多世代が協同し繋がりを持つ機会となった。地域住民から「ありがとう」と声をかけられ、若者の自信にもなった。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人 青少年自立援助センター
代表者	理事長 河野 久忠
設立年月	1977年6月 設立 1999年4月 法人化
住所	東京都福生市福生2351-1
ホームページ	https://npo-ysc.jp/
メッセージ	自分らしい時間を取り戻すため、 一歩踏み出すきっかけになりたい！

取組の様子





取組のかたち

地域で孤独・孤立に苦しむ人たちと繋がり、支援するために、食を通じて、官民を超えた支援者同士の連携プラットフォームを構築すること

届けたい人たち

年代や性別を問わず
困窮や障害(病気)その他の事情で
孤立してしまった人、その周囲にいる家族、
そして官民を問わず支援者の人たち

私たちの軌跡

2017年に団体を設立し、その直後から八王子市と連携して食を通じた困窮者支援に従事してきた。フードバンクであるため食の支援がメインであるが、しかし単に食品のバラマキをしているのではなく、むしろ食は一種の手段として、人と繋がることを主軸・目的として活動してきた。このような活動形態が可能になったのは、やはり八王子市との深い連携が背景にあることによる。やって来る人たちの属性は実に多種多様であるが、唯一共通しているのは「他に誰も頼ることが出来ない人たち」であること、困窮のその奥には孤独・孤立の問題があることに気づき、孤独・孤立対策に取り組んでいる。

私たちの新たな取組

上記から生まれた問題意識が発展して、実は困窮だけに問題は限定されないことに気が付いた。「他に誰も頼ることができない人」は必ずしも困窮者だけではない(例えば子どもなど)。もはや困窮者支援という枠組だけでは間に合わない。そこで孤独・孤立という大きなテーマを共有し官民を超えた地域での連携の構築こそが必要ではないかと思ひ至り、その構築のために八王子市の関連部署、病院や社会福祉法人その他の民間団体、更に企業にも声をかけて「月例会」という形での勉強会を基盤として、そこから派生した各種イベント・研究会などを実施した。今年度は新たに企業を中心とした職場研究会を開催した。

関係機関とのチームワークのつくり方

小規模な当民間団体が声をかけて、官民を問わず、これだけの方々(20団体強)が集まってくれたこと自体が驚きであるが、それは孤独・孤立という問題を誰もが気にしていたからだろう。しかし当初はプロジェクトメンバー間での横の関係は必ずしも親密なものではなかった。それが毎月の月例会での発表や意見交換などで徐々に関係が形成され相互のやり取りが生まれ始めた。「顔の見える関係」の威力であろう。しかも今回で3年目の継続プロジェクトでもある。単年度では達成できない(どうしても時間が必要な)団体間の横の継続的な関係作りの一つの事例にもなっている。

取組の成果

今年度は大きな目標が二つあった。①孤独・孤立の背景となっている精神疾患の理解を深めること、②(現メンバーの医療・福祉・行政を超えて)企業にも参加してもらうこと。職場こそが孤独・孤立の重大な発生源の一つだからだ。①に関しては著名な臨床心理士に参加してもらい、②に関しては参加企業を中心とした(八王子市の保健担当部署も含めた)研究会を開催した。このように、問題理解の深化と横の連携の強化発展を通じて、本来の対象者・つまり孤立に苦しむ人たちを発見し、相互に紹介・連携していく事例を積み上げていった。今年度は約20名ほどを行政や病院・保健所に繋いだ。月例会7回開催、各回35名前後参加。

団体概要

団体名	一般社団法人 フードバンク八王子
代表者	國本 康浩
設立年月	2017年5月
住所	東京都八王子市中町2-9
ホームページ	https://foodbank8.tokyo/
メッセージ	フードバンク八王子は「誰もが食べることができる安心で安全な地域共生社会」の実現を目指しています。

取組の様子



写真・左
・毎月の月例会の風景
(7月)



写真・右
・企業を中心とした「職
場研究会」の開催風景



取組のかたち

居場所づくり(週1回程度の継続開催)
遊びなどを通じた交流機会(こども×多世代)
他団体／関係機関連携(こども支援・
高齢者支援・社会福祉協議会・行政)

届けたい人たち

地域のこども(安心して過ごせる場を
必要とする子等)とその保護者
地域のシニア(地域課題への
取組みや集いの機会を求める方)

私たちの軌跡

たのつくは、こどもの保育サービスや習い事ではなく、公共施設の一室を活用し、こどもも大人も「集って」それぞれの時間を過ごせる「イバシヨ」の開催を継続してきた。モノづくりやボードゲーム、お茶飲み話、イベント準備など、日常の延長の“たのしい”をつくっている。私たちが大切にしているのは、「こう過ごすべき」を押しつけないこと。集った人の中にある「やってみたい！」や「好き・得意」を尊重し、こどもも大人も自分のペースで関われる“ゆるやかなつながり”を広げることである。実際に参加者からは「気楽に立ち寄れて、みんなに会える」「水曜日が楽しみになった」といった声が聞かれ、日常の中の接点として機能し始めている。

私たちの新たな取組

本事業では、週1回程度の「イバシヨ」を継続しながら、イベント開催や他団体との連携を通じ、地域の中に新しいつながりの入口を増やす取組を進めた。具体的には、不登校児童の保護者の会と連携し、平日午前に参加できる居場所づくりの連携を行った。また、高齢者支援団体との多世代交流や、市主催の福祉イベントでの交流企画などを通じて、こどもを起点に地域のつながりを広げる機会をつくっている。各種取組の接点やつながりを一つの企画に集約する形で、こどもと大人で企画する地域フェス「たのつくフェス」を企画。特定の活動地域だけでなく、「こども・多世代」にわたり、市内にネットワークを広げた。

世代をこえた交流を生み出す仕掛け

同じ地域センターで活動する高齢者サロン「オレンジカフェ」と、月1回程度の交流を重ねている。特別なプログラムをつくるより、自己紹介やなぞなぞ、けん玉など“普段の活動の延長”で顔を合わせ、自然に会話が生まれる形を大切にしたい。交流を重ねる中で、シニアの方から「こどもたちに本を読んであげたい」という声が上がリ、スタッフと協力して準備し、実際に「おはなし会」が実現した。参加する側だった方が「一緒にやってみる側」へと立場を行き来し、こどもだけでなく大人同士の関係にも前向きな変化が見えた。こうした“役割”の芽は、孤独・孤立を未然に防ぐ「地域のつながり直し」の表れだと感じている。

取組の成果

こどもを中心に「会える／話せる／頼れる」関係が日常の中に増え、居場所が地域のゆるやかなセーフティネットの入口として機能し始めた。関係者からも「楽しいと思うことが自由に結びつく」「“たのしい”で大人とこどもをつないでくれた」といった声があり、支え合いのハードルを下げる価値が見えてきた。「参加」から「役割」へ進む変化が生まれた。交流やイベントを通じて、初対面同士でも自然に協働が生まれ、保護者や地域の大人が運営に関わる場面も増えた。今後も市や他団体と共に孤独・孤立の予防の起点となる場や機会を広げ、地域のネットワークとして根づかせていきたい。

団体概要

団体名	こどもと大人の地域活動「たのつく」(任意団体)
代表者	渡部 岳
設立年月	2022年4月
住所	東京都小平市上水本町3-12-16
ホームページ	https://tanotsuku.wixstudio.com/kodomo
メッセージ	「たのつく」は「たのしいをつくろう!」という言葉の略語として、活動をはじめるときにつくりました。こどもと大人の“たのしいをつくる”営みが地域社会のウェルビーイングを高めることにつながると感じています。「どうやるの?」気になった方、ぜひ情報交換・意見交換しましょう!

取組の様子





子どもがお互いの苦しみに気づき支え合う 「OKプロジェクト」

一般社団法人
エンドオブライフ・ケア協会

神奈川県を中心と
した首都圏、他全国

取組のかたち

出前型／学校・居場所連携型

届けたい人たち

子ども・若者／学校・教育関係者／
地域の居場所運営者

私たちの軌跡

苦しさを抱えていても、「困っている」「助けてほしい」と言葉にできない人は少なくない。特に子どもや若者の苦しみは周囲から見えにくく、気づかれぬまま孤立が深まることがある。私たちは、そうした“声になる前の苦しみ”にどう向き合えるのかを、限られたいのちと向き合うホスピスの現場で学んできた。たとえ解決が難しい苦しみを抱えていても、人は「わかってもらえた」と感じ、自身の支えに気づくことで、穏やかさを取り戻すことがある。この学びをもとに、全国の学校・医療福祉・地域など多様な現場で、日常の関係性の中で活かせる学習プログラムを実施してきた。

私たちの新たな取組

本事業では、孤独や苦しみが深刻化する前の段階に着目し、一次予防の視点から、①関東を中心とした小中学校・居場所での授業実施、②授業後の教員・居場所運営者へのインタビューを通して日常への実装の検討、③他地域とのネットワーキングを一体で行った。学校6校・居場所3か所において計26回の授業を実施し、延べ1,050人の子ども・若者が参加。授業後には教員・運営者6件のインタビューを行い、教室内外のキーワード掲示や日常的な声かけなど、学びを生活の中でリマインドする工夫を共有した。あわせて、他地域の関係者との意見交換を4回行い、地域実装や展開の可能性について検討した。

この取組が生まれた“はじまりの物語”

孤独・孤立は、深刻化してから支援されるものになりがちだが、実際には「困っても助けてと言えない」子どもも少なくない。苦しみは必ずしも言葉にならず、見過ごされてしまうこともある。専門職だけでは間に合わない現実の中で、日常の関係性にこそ、気づきや支え合いの力があるのではないかという問題意識があった。だからこそ、子どもの苦しみに最初に気づくのは大人だけでなく、近くにいる子どもである可能性にも目を向け、子どものわかる言葉で、「やってみよう」と思える形を大切にしている。苦しみが深刻化する前の段階で、子ども自身とその周囲の関係性に働きかける取組が必要だと考えた。

“ここがポイント！”現場発の知恵

授業で学んだ内容を一過性にしないため、教室掲示や日常的な声かけなど、学校内での工夫が行われた。また、学校外の居場所運営団体とも意見交換を行い、居場所の特性に応じたプログラムのカスタマイズについて具体的な対話が生まれた。さらに、他地域の関係者との意見交換を通じて、学校や居場所といった場の違いを越えて共通する課題や工夫が言語化された。単発の実践にとどめず、現場同士が学び合いながら改善を重ねていくことの重要性が共有され、今後の展開に向けた視点が整理された。

※本事業の詳細(報告書・冊子等)は、<https://endoflifecare.or.jp/posts/show/9794>にて公開。

取組の成果

教員からは、「例年よりも『先生、聴いて』と相談してくる子どもが増えた」「すぐに大人に委ねるのではなく、子ども同士で声をかけ合い、まず自分たちで対応しようとする姿が見られるようになった」といった実感が聞かれた。子どもからは、「すべてを誰かに話すわけではないが、誰かの支えになりたい」「助けを求めるかどうかは自分で決めてよいと感じた」といった声が寄せられた。短期間で因果関係を断定することは難しいものの、授業後の関わり方や声かけの変化が、学校や居場所の現場で感じ取られている。また、授業や意見交換を通じて関わった大人や若者が、次の担い手として育っていく可能性も見え始めている。

団体概要

団体名	一般社団法人エンドオブライフ・ケア協会
代表者	小澤 竹俊
設立年月	2015年4月
住所	東京都港区虎ノ門 3-17-1 TOKYU REIT虎の門ビル6階
ホームページ	https://endoflifecare.or.jp/
メッセージ	声にならない苦しみに身近な誰かが気づける関係を、学校や地域の中で一緒に育てていきませんか。全国にいる280名の認定講師が7年間で8万人に届けてきました。

取組の様子

1. 授業の実施(小中学校 / 居場所)



2. トラッキング調査 (感想文分析・大人へのインタビュー)



3. 他地域とのネットワーキング (これまでの取り組み/来年度に向けて)



4. 実践のまとめとフォローアップ (冊子・報告書・フォローツール作成)



在日ミャンマー人の孤独・孤立を防ぐ 定住支援相談事業

特定非営利活動法人
リンクトゥミャンマー

横浜市を中心とした神奈川県
全域及び関東各都県

取組のかたち

在日外国人が日本でくらすための
定住支援や相談窓口の設置

届けたい人たち

ミャンマー人を主とした在日外国人
在日外国人と関わる日本人

私たちの軌跡

ミャンマー人のみならず日本に来て生活をはじめると在日外国人は自国文化と異なる文化、言語、ルール、マナー等に戸惑いや混乱を感じる人が多い。日本人との相互理解やコミュニティとの関わりが薄いと、長く日本に滞在していても孤独や孤立状態が生じ得る。当団体は、在日外国人の生活に寄り添った地道な定住支援事業を行うことでそうした不安要素に対応し、在日ミャンマー人と日本人がともに日本で生活できることを目指している。また、市民向けの講座の開催や地域の国際交流イベントへの参加を通して日本とミャンマーの関係等の情報発信を積極的に行い、日本人とミャンマー人の相互理解が進むよう努めている。

私たちの新たな取組

在日ミャンマー人はコロナ渦以降再び増加傾向にあるが、他国から来た外国人コミュニティと比べるとまだその規模は小さく、地域や職場などに生活や仕事のことで頼れる人が少ない。またミャンマーの文化や民族、政治状況に対する理解が日本で十分得られているとはいえず、そうした背景が結果的に外国人定住者が受ける行政サービスや医療、教育面でのトラブルとなり得る。こういった背景を踏まえ、本事業では、充実した定住支援を行うための支援員を新たに雇い、相談支援を通じた在日ミャンマー人の孤独・孤立対策に取り組んだ。

うまくいかなかった時の工夫と試行錯誤

新しい土地に移住した際の手続きは非常に煩雑で、日本に来たばかりのミャンマー人にとっては一層難易度が高い。そこで、言語によるサポートに加え、制度や手続きに関する知識と理解を持った的確な支援を行うよう努めた。また、行政では以前より多言語対応が進んでいる一方、医療や民間サービスでは英語や平仮名のみでの併記が少なくないため、支援員は在日ミャンマー人と身振り手振りも交えた、丁寧で密なコミュニケーションを図った。多様なケースを包含するマニュアルを作成することは容易ではなく定住支援事業は属人化しがちであるが、インターンや複数のスタッフが協力しあい、事業を行っている。

“ここがポイント！”現場発の知恵

日本に移住した、あるいは定住しているミャンマー人にとって就職やアルバイトは在留資格にも影響する非常に重要な問題である。最近は外国人を積極的に雇う企業が増えたが、面接で慣れない日本語で自己アピールすることは簡単ではなく、企業にとってもその方がうまく周囲と連携して仕事ができるか判断するのは難しい。そこで、支援員を中心にアルバイト面接の練習や同行、履歴書作成の手伝い等を行い、採用から就労に至るまでを支援した。また採用後の手続きも職場によって様々であるため、採用後も継続的にサポートした。このように、「一つ一つの段階の丁寧な伴走」が結果的に信頼関係の構築にもつながったといえる。

取組の成果

これまでの活動により多くの在日外国人から相談が寄せられるようになり、毎月20～60件の相談を受け付けている。特に今年度から支援してきた藤沢市の家族のように、様々なミャンマー人世帯との信頼関係の構築ができた。またSNSやミャンマー人コミュニティ内で当団体のことが伝聞されることも増え、一つ一つの活動が認知度の向上につながっている。加えて日本人からの相談を受けることも増えており、国内においてもミャンマー人支援団体としての認知が広がったといえる。今後も引き続き在日ミャンマー人と日本人が安心して共生できる社会を目指して努めていきたい。

団体概要

団体名	特定非営利活動法人 リンクトゥミャンマー
代表者	市原 彩子
設立年月	2017年3月
住所	神奈川県横浜市金沢区富岡東 6-30 E502
ホームページ	http://www.npoltm.org/
メッセージ	引き続き相談者が満足できる定住支援を行うと同時に、文化交流事業を通じて多文化共生のすそ野を広げていきます。在日外国人や外国にルーツを持つ人々の孤独・孤立を防ぐことは、在日外国人コミュニティと日本社会をつなげ、社会が健全に発展していくためにも意義のあることです。今後も積極的に活動していきます。

取組の様子





見えない孤独・孤立に直面している 子ども若者を支え、育ち合いが生まれる 地域づくり

特定非営利活動法人
教育支援協会南関東

神奈川県横浜市

取組のかたち

「若者を支援する事業」から
「若者が地域を支援する循環」へ

届けたい人たち

居場所がないと感じる子ども若者
地域で子ども若者を支えたいと感じる大人

私たちの軌跡

つながり、支え合い、学び合える社会の創造を目的に、市民が多様な関係性を築きながら地域社会に主体的に関わる人材を育成し、地域教育力の向上と、子どもから大人まで誰一人取り残さない自由な学びが保障される社会の実現を目指している。

2016年度以降、横浜市内外において、不登校や生活困窮世帯の子ども・若者支援を軸に、学習・生活支援、放課後事業、地域活動拠点運営、子育て支援などの行政委託事業および自主事業を継続的に実施し、地域の中で人が役割を持ち、支え合いながら学び合う仕組みづくりに取り組んでいる。

私たちの新たな取組

不登校のみならず、家庭に居場所がない、他者との関係性が乏しいなどの理由から、夜遅くまで一人で過ごしている子ども・若者が増えています。本事業では、地域の居場所を中心に、青少年委員等の支援組織・団体や普段は子どもと関わる機会の少ない大人も含めたネットワークを再構築し、見えない孤独・孤立に直面している子ども・若者を支えることを目的としています。また、社会とつながることが難しい若者が、子どもに寄り添う「ピアサポーター」として地域活動に関わることで、「支えられる側」から「支える側」へと役割を変え、子どもや地域にとっても新たな視点や関わりをもたらすきっかけづくりを目指します。

“来る人”から“関わる人”へ

「自分に出来るんでしょうか」そう話していた若者が、本事業のスタート地点だった。不登校やひきこもりの経験があり、初めて社会的な役割を担うことに強い不安を抱えていた。私たちは、できなかったことを責めるのではなく、丁寧な説明と確認、できたことを言葉にして伝える関わりを重ねてきた。うまくいかない日も含め、その経験すべてが本人の学びになると捉え、関係を継続した。その結果、若者は「来る人」から、周囲に目を向け行動する「関わる人」へと変化し、今では「ピアサポーター」として現場を支え、頼られる存在になりつつある。本事業は、関わりの中で社会とのつながりと自信を育む再チャレンジの場となっている。

一人ひとりの想いが動き出す場に

その日の調子や気持ちの揺らぎも含め、「ピアサポーター」一人ひとりの状態を尊重した関わりを続けてきた。「ありがとう」「助かった」といった言葉を受け取る中で、若者は自分の存在が誰かの役に立っていることを実感し、少しずつ自ら関わろうとする意欲を育んでいった。若者一人ひとりの想いが動き出した背景には、関わる大人自身も「教える」「支える」という立場から、「地域の仲間として関わる」意識へと変化したことがある。若者と向き合う中で、大人もまた学び、育ち合い、活動後に一緒に振り返ったり、迷いや失敗を共有しながら関わる姿勢が、若者にとっての安心感となり、次の一步を踏み出す力へとつながっていった。

取組の成果

不登校やひきこもり経験のある若者が、地域の中で役割を持ち、社会とのつながりを回復していく実践の場として本事業を実施した。初めて社会的な役割を担う若者にとって、人や子どもと関わることや社会的ルールの理解は大きな挑戦であり、丁寧で継続的な関わりが欠かせなかった。研修や活動後の振り返りや日々のOJTを通して、「何ができたか」「次にどうするか」を一緒に整理する関わりが、安心して行動を重ねる土台となった。単発の取り組みでは難しく、継続した関わりが若者の変化につながっている。感情の揺らぎも見られたが、肯定的な声かけと実践の積み重ねにより、自ら役割を理解し行動する姿が見られた。本事業には、「ピアサポーター」延べ39人が参加し、活動回数は延べ168回(総活動時間783時間)に及んだ。今後も若者が地域の中で役割を持ち続けられるよう、事業の継続と発展を目指していきたい。

団体概要

団体名	NPO法人 教育支援協会南関東
代表者	理事長 岩間 文孝
設立年月	2015年7月
住所	神奈川県横浜市南区高根町3-17-12KSビル3階B号室
ホームページ	https://super-ykst.jp/
メッセージ	居場所は、次の一歩が生まれる場所であり、孤立していた若者が人と出会い、地域の一員へと踏み出していく出発点です。その一歩を支え続けることが、誰も取り残さない社会につながっていくと私たちは信じています！

取組の様子



ピアサポーター企画
「びゅんびゅん飛行機を飛ばそう」
変わり種の紙飛行機づくりを予定していたが、子どもたちの「大きな飛行機を飛ばしたい」という声を受け、子どもの「やってみたい」に全力で向き合う活動となった。



地域連携イベント
「つながるフェスティバル」
子どもから声をかけられたことをきっかけに、緊張を越え、ピアサポーターとして関わる一歩を踏み出した。



地域連携イベント
「おもちつき」
おもちつきと豚汁配布を担当。大行列に戸惑いながらも、地域の方々の温かい「ありがとう」に支えられ、達成感を味わった。



誰もが気軽に集う居場所を孤立する 子育て家族にとっての身近な相談室に

NPO法人
街カフェ大倉山ミエル

神奈川県横浜市

取組のかたち

親のピアサポートの場、居場所
引きこもりがちな若者の居場所
団体の連携

届けたい人たち

子育てに悩みや不安を抱えていたり
負担を感じている親、孤独・孤立を抱える子
学校に合わない親子(不登校支援)

私たちの軌跡

大倉山ミエルは妊婦からシニアまでの居場所。自分たちのヤリタイことをベースに多様な活動を行っている。支援に繋がれずに悩みを抱えるひとにもココミで参加し、日常的な会話をきっかけに相談しあう関係を作っている。この孤立・孤独対策に繋がる活動について、昨年度モデル事業に参加した。そこで繋がり支援の両輪が重要だと理解し、同じ分野で活動している団体との連携も進めている。このように常設型の集いの場「コミュニティカフェ」が、「孤立するひとの相談を受け止め、お互いの対話を促し」、困り切るまえのセーフティネットを地域の繋がり・連携の中に生み出すことを目指している。

私たちの新たな取組

【繋がり強化】 みかん会④学校に合わない子の親の会を支援しつつ、すだち会①学校に合わない子の父親の会、りんご会⑤子を持つシングル会、いちご会①未就学児の親の会などを実施。(〇は開催回数)
【団体連携】 不登校支援を行う3団体(港北区内で東急東横線沿線駅が最寄り)が集まり、募金活動の連携や利用者が参加しあえる共通カレンダーづくり、学校との付き合い方の検討など運営強化を議論・実践
【菊名駅前店舗の若者の居場所づくり】 週末の居場所の立ち上げ。対象者と支える大人のワークショップや試行イベントを実施(小学校に合わない子のゲーム大会、ごちゃまぜの自習室、団体勉強会他)。

最初の一步はこんなところから

【菊名駅前店舗の若者の居場所づくり】は、今年度から立ち上げに着手した取組です。ミエルは、区内の支援団体の集まりの事務局を担っており、若者の居場所を別の場所で作りたいと思っていた。機会があれば一緒にできるパートナーを探していたところ、ミエルの活動に賛同した建物所有者から、駅前の店舗で使用していない時間帯に無料でミエルの取組と似たような活動をしないかと持ち掛けられた。また、寄付の申し出もあった。ここでの活動は、あまり具体的な計画を立てずに、賛同する区内の活動団体が集まって、対話の会・不登校の子ども居場所から始めた。

共に進む仲間を作るための工夫

【団体連携】は、互いの理解を深めるため最初に団体の活動を資料化し対話を重ねた。その対話も誰がどのような考えを持っているか分かるよう議事録を共有した。そこで運営強化が共通の課題として見つかると、団体連携として新たな取組を行うことになった。そのうちのひとつ募金活動の連携において、社会的な意義をアピールするのではなく顔の見える繋がりの中で共感を得て支援してもらった方が良く、募金の使い方について、ビジョンとパーパスを明確化したことで、団体連携の「活動の礎」ができた。私たち3団体は、【菊名駅前店舗の若者の居場所づくり】でも活動の核となった。

取組の成果

【繋がり強化】では、不定期開催の「みかん会」が2か月ごとの開催となり、父親、シングル、未就学児と対象が広がった。今後、様々な孤立した方を見つけたら時に参加を促すことができそうである。
【団体連携】は、一つの団体だけでは難しい募金活動や学校との対話を協力して実施することに着手できたので、今後さらに連携を強化したり仲間を増やしたりできそうである。
【駅前店舗の若者の居場所づくり】は、引きこもりがちな子ども・若者の会と支援者の集まりの両輪で活動が広がった。各団体が主催する活動に他団体の子どもや支援者が参加し新たな交流が生まれた。

団体概要

団体名	NPO法人 街カフェ大倉山ミエル
代表者	鈴木 智香子
設立年月	2010年11月
住所	神奈川県横浜市港北区大倉山5-32-26
ホームページ	http://cafemiel.jimdofree.com
メッセージ	よこはま 子ども・若者が孤立しない地域づくり研究会の事務局を担っています。市内の居場所が集まり、来年度、貧困などの課題について横浜市と協働の勉強会を実施！

取組の様子





孤独感を抱えて働く若者のサード・プレイス/交流とつながりの場

認定NPO法人
ユースポート横浜

神奈川県横浜市

取組のかたち

セーフティネットとなる相談の場と
交流の場の提供

届けたい人たち

働く孤独な若者

私たちの軌跡

認定NPO法人ユースポート横浜は、横浜市を中心に、ひきこもりや不登校、就労困難など、孤立状態にある若者への支援を長年続けてきた。その中で、仕事に就いた後も孤独を感じやすく、支援の対象からも外れがちな「働く若者層」の課題に直面し、2024年に「ユースポートCafé～働くあなたのサードプレイス～」を開設した。毎月第1・第3土曜日に、午前はカウンセリング、午後は講座と交流の時間として運用している。利用者から「安心できる場」として支持される中、個別相談による定着支援や専門機関への橋渡しも含め、一人ひとりに寄り添い、孤独孤立を防止する取り組みをしている。

私たちの新たな取組

2025年度は、立ち上げた居場所を安定的に運営しつつ、交流タイムを主軸とした新たな拡充を図っている。相談を通じて若者一人一人の相談に応じると共に、場を介して他者や地域とのつながりが生まれる取り組みを展開。これまでの調理、読書会、映画鑑賞に加え、地域の他の居場所との連携や地域イベント、ボランティアへの参加といったプログラムを取り入れた。交流を通じて社会との接点を増やすことで、孤立を未然に防ぐための新たな仕組みづくりを展開している。

つながりを力に—連携の工夫

地域の2つの居場所との交流企画を実施した。事前の打ち合わせでは、互いの価値観や利用者層を詳細に共有し、普段とは異なる層との交流が実現するよう意識した。具体的な交流内容は、お互いの場の人気企画を体験し合う「相互の出張講座」や、地域のお祭りへのボランティア参加である。仕事帰りの若者が参加しやすいよう夜間の時間帯を設定したり、活動場所を屋外へ広げたりと、時間や場所に変化をつける工夫も凝らした。他団体の優れた手法も取り入れることで、多様な若者が安心して参加できる協力体制を築いている。

“来る人”から“関わる人”へ

利用者が受動的ではなく主体的にかかわれる仕組みとして、会員自らが企画・実施する「みんなのCafe時間」を立ち上げた。「一人ではできないことを楽しみたい」「好きなことを紹介したい」といった想いを形にする場である。年度内の企画は満席の盛況となり、その後もお茶を楽しむワークショップや音楽の楽しみ方レクチャーなど、新たな企画案が利用者から上がっている。スタッフ主導の講座だけでなく、自らの提案で他者と交流し、反応を得る体験が、参加者にとって自分たちの場であるという意識や、他者とつながるきっかけ作りとなることを願っている。

取組の成果

本事業の定期開催を継続し、現在は安定的な運用が行われている。1月末時点での延べ利用件数は172件となった。リピーターの増加に伴い、年代や性別、職業を問わず多様な若者が集うコミュニティが形成されつつある。また、港北区や中区の居場所との交流企画を通じて、利用者に新たな居場所を知る機会を提供できたほか、先方から本事業への利用希望者が出るなどの相互作用も見られた。今後はグループインタビューを実施し、その結果を質的に分析することで活動の効果を精査する予定だが、孤独を抱える若者が地域でつながりを持つための土台作りが少しずつ進んでいる。

団体概要

団体名	認定NPO法人 ユースポート横濱
代表者	熊部 良子
設立年月	2006年9月
住所	神奈川県横浜市西区北幸1-11-15横浜STビル11階
ホームページ	https://www.youthport.jp/
メッセージ	認定NPO法人ユースポート横濱の使命は、孤立状態にあることで困難を抱えている人に対してその人がありたい姿に近づけるよう就労や生活に関する支援をし支援を通じて発見した課題に取り組むことによって社会に貢献することです。

取組の様子



運営・認定NPO法人ユースポート横濱
第1・第3土曜日 開催
働くあなたのサードプレイス
ユースポートCafe

ユースポートCafeは、働いている人が週末に人と交流できる場所です。
ユースポートCafeは、2006年から無業の若者の就労支援に取り組んできた認定NPO法人ユースポート横濱が、新たに働いている人のための場として開設しました。無業の若者向けの公的な相談窓口は充実してきましたが、働いている人にもさまざまな悩みや不安があります。孤独や不安を抱えながら、誰にも相談できずに孤立してしまうこともあるかもしれません。そんな時には、ぜひユースポートCafeにいらしてください。
ユースポートCafeには、気軽に話せる予約制のカウンセリング、働く人に役立つ講座、ゲームやクッキングなどの交流タイムの時間の3つのメニューがあります。会員登録を行えば、お好きなタイミングでどのメニューにも一回から予約・参加が可能です。

働く人のための心理カウンセリング (10:00~11:00)
職場ではなかなか話せない悩みや悩みを相談できる時間です。
相談例：職場の人間関係/転職をしようかどうか迷っている/もやもやした気持ちを話して整理したい、など。
料金:3000円/50分 ※詳細は裏面をご覧ください

楽しむ講座・役に立つ講座 (13:00~15:00)
楽しむ講座 (ヨガ、クラブ、カードゲームなど)・役に立つ講座 (社会保険の知識、ライフキャリアプラン、仕事と介護の両立など)、毎日の生活に新しい体験や学びを加える講座を開催します。
料金:500円~2000円 (講座により異なる)

交流タイム (15:00~18:00)
参加者の皆さんが交流を楽しむ時間です。一緒に買い物に行って軽食を作ったり食べる、ゲーム、映画鑑賞、お花見など、自然に仲が深まる企画を準備してお待ちしています！
料金:500円+材料費実費 (500円以内目安)

ご利用をお考えの方へ
まずは見学会にお越しください！(予約制・所要約30分)
見学会では、施設のご案内と利用方法を説明します。気になることがあれば、何でも気軽にどうぞ。
説明を聞いてから、登録するかどうかを決めていただけます。

見学会のお申込み・お問い合わせはHPまで
ユースポートCafe
<https://www.youthport.jp/cafe/>
〒222-0033 横浜市港北区新横浜3-18-6 新横浜TSビル5階

- 新企画！みんなのCafe時間 - ChatGPTと友達になろう！ ～初心者歓迎・みんなで発見～

ChatGPTを気軽に体験しながら、遊びや仕事・日常での活用法を学べる交流イベントです。初心者でも安心して参加でき、楽しみながらAIとの付き合い方を発見できます。経験者の方も、使い方の共有や新しいアイデアとの出会いがあり、学びを深められるはず。一緒にAIと友達になりましょう！



2025年**10月18日(土)** 企画者
13:00 - 14:45 参加費500円 **ぱんだノート**

企画者より一言

「初心者も経験者も、一緒にAIの魅力を見つけましょう！」



保健室となり文庫：安心して孤独でいられる本のある居場所

一般社団法人
プラスケア

神奈川県川崎市

取組のかたち

本がある場所を通じた居場所づくり
文化でまちの中に出ていくきっかけを作る

届けたい人たち

まちの中で孤立しがちな子供・若者・高齢者など

私たちの軌跡

「病院に行くほどではないちょっとした悩みや、がんや認知症など大きな病気に罹患してどうやって生きていけばよいか？など、病院では相談しにくい悩みを気軽に話ができつながりを作ることができる場」である暮らしの保健室を、2017年に開設。開室当初から多くの利用者がお越しになり、がんの患者さんやその家族だけではなく、メンタル不調や被虐待、職場や家庭内での孤独・孤立の問題などが持ち込まれてきた。そこで、「薬で人を健康にするのではなく、人と地域とのつながりを利用することで人を元気にする」イギリス発祥の仕組みである社会的処方を組み合わせ、孤独・孤立の問題に取り組んできた。

私たちの新たな取組

医療者と市民とが気軽につながれる場所である暮らしの保健室から徒歩15秒の場所に、「安心して孤独でいられる居場所」である保健室となり文庫(私設図書室)を常設し、それらと社会的処方の仕組みを組み合わせることで、川崎市中原区を中心とした地域に住民同士が互いに健康を支え合う居場所を作り、またリンクワーカーのハブとなる機能を持つ拠点としての場を育て孤立・孤独の課題に取り組む。

ここで見つけた新たなつながり

保健室となり文庫の本たちは全て書き込みができる仕様にした(書き込みをすることを「育て」と呼んで推奨した)。すると、本を通じて交換日記のような交流が生まれるきっかけに。例えば、ある人が「何かあった日は、一駅余分に歩きたくなる」といった本の一節に対し「わかります！同じような人、いますか？」と書き込みがあった。すると後日、それに対して「私もです。それでいまここに来ました」と返事。お互い、顔も名前も知らない、またこの場所を訪れた時間も全く異なる二人のやり取りですが、そういったやり取りを通じて「自分の声にこたえてくれる人がいる」認識が孤独を癒していくのではないかと思う。

取組の成果

保健室となり文庫は4月～12月までで611名の来室者を迎えた。また、活動はその室内だけにとどまらず、本を通じて地域とつながっていくことに取り組んだ。10/25～11/8には、武蔵新城の本のある場所、書店の文教堂など6か所を巡るスタンプラリーを行い、377名の方が参加した。さらに、このイベントで培ったつながりを利用して、「かわさき・のきさきアート」プロジェクトを始動することが決定した。このプロジェクトは、市民の方々に自宅の「のきさき」に棚(箱)を設置してもらい、そこに本や写真など好きなものを展示してもらうことで、町に対する表現活動を行ってもらうものである。

団体概要

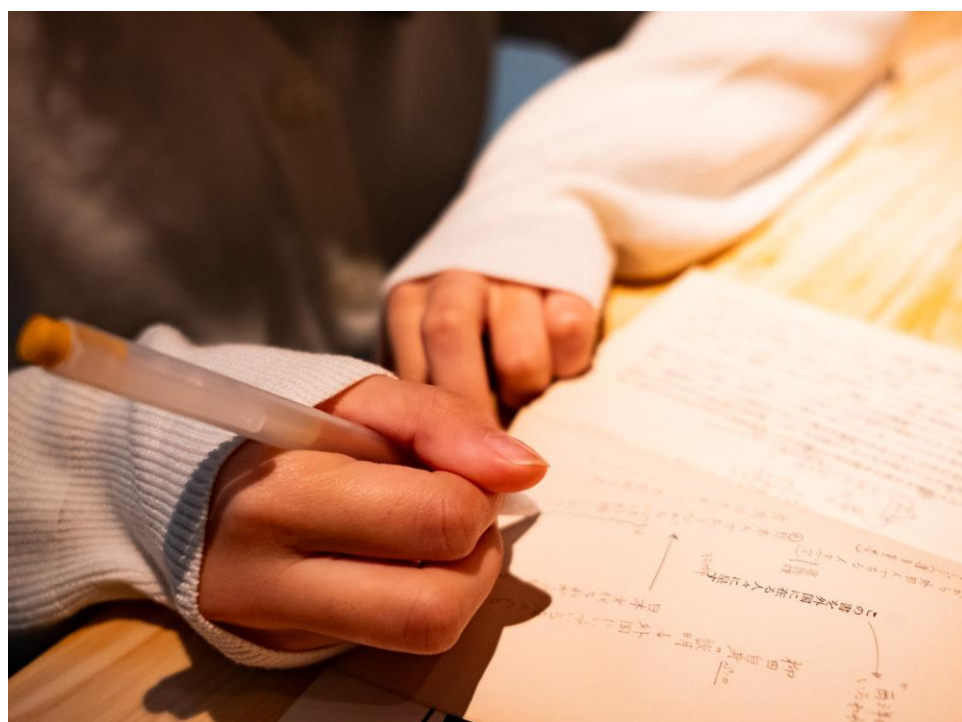
団体名	一般社団法人 プラスケア
代表者	西 智弘
設立年月	2017年4月
住所	神奈川県川崎市中原区上新城2-7-5セシーズイシイ23A101
ホームページ	https://www.kosugipluscare.com/
メッセージ	人と人との直接的なつながりだけではなく、本という文化・モノを通じて人がつながっていき試みの実現できました。ぜひ多くの方にお越しいただきたいです。

取組の様子

◆ 保健室となり文庫の様子



◆ 本への書き込みの様子



◆ 保健室となり文庫の内観





取組のかたち

産前産後の母親を支える地域のつながりづくり

届けたい人たち

妊娠期・産後間もないママ

私たちの軌跡

私たちは、子育て中の親子が地域の中で孤立せず、安心して子育てができる環境をつくりたいという思いを軸に活動している。乳幼児期の親子が気兼ねなく出かけられる居場所を設け、親子が自然につながり、ほっとできる時間を大切にしてきた。また、ベビーシッター派遣や臨時保育などを通じて、子育ての負担を少しでも軽くし、親が自分の時間を持てるよう支援している。あわせて、講座や研修の開催により、地域で子育てを支える人の学びを深め、その輪を広げる取組を続けている。私たちは、現場で出会う一人ひとりの子育て家庭に向き合い、その声に耳を傾けながら、地域全体で子育てを支える仕組みづくりに取り組んでいる。

私たちの新たな取組

本事業では、これまでの取組だけではつながりづらかった「子育て初期の母親」の孤立を防ぐため、支援を受ける側と支える側の双方に向けた取組を行った。母親は「こどものため」であれば行動に移しやすい特性があることから、赤ちゃんへの関わり方を学ぶ「はじめて子育て応援講座」を実施し、参加のハードルを下げながら地域との接点をつくった。また、地域の子育て支援者を対象に、子育て初期の女性が孤立しやすい背景や、母親に寄り添う関わり方を学ぶ研修会を開催した。これらの取組により、子育ての早い段階から母親が社会とつながり、支援者が孤立を予防する視点を持って関わられる地域づくりを目指した。

共に進む仲間を作るための工夫

本事業では、行政や専門職と連携し、対象となる人に確実に情報が届くことを重視した。上越市子ども家庭センターと連携し、講座開催期間中に出生届や妊娠届を提出する人へチラシを配布してもらうことで、子育てのスタート期にある家庭へ早い段階で周知を行った。また、上越助産師会と連携し、乳幼児全戸訪問の場で情報提供を行った。これは、助産師会所属の助産師複数名が子育て支援者向け研修会に参加したり、「はじめて子育て応援講座」を実際に見学したりしたことで、より事業の目的や内容への理解が深まり、顔の見える関係の中で共に支援を進める体制づくりにつながった。

取組の成果

母親向け講座は6回で37組の親子が参加し、アンケートでは回答者全員が肯定的な回答を示した。産前産後の母親が地域と関わるきっかけをつくり、孤立の予防につなげるという目的は概ね達成できた。赤ちゃんのための講座を入口とすることで、人との関わりに不安を抱える母親も参加しやすく、講座後には他の親子や支援者につながる姿が見られた。子育て支援者向け研修は2回でのべ80人が参加し、産前産後の母親の孤立を早い段階で捉え、予防的に関わる視点が地域に共有された。今後は、第2子以降の母親にも同様の不安や孤立感があることを踏まえ、より幅広い母親が早い段階で支援につながる仕組みづくりを目標とする。

団体概要

団体名	認定NPO法人 マミーズ・ネット
代表者	理事長 中條美奈子
設立年月	1996年9月
住所	新潟県上越市中田原1
ホームページ	https://www.mammies.jp/
メッセージ	孤独や孤立は見えにくく、正解のない課題ですが、現場での小さな気づきや関わりの積み重ねが確かな支えになります。私たちも引き続き試行錯誤を重ねながら取り組んでいきますので、それぞれの地域で共に歩み、支え合っていけたら嬉しいです。

取組の様子



赤ちゃんの抱きかたは、今やAIやSNSでたくさん見られます。でも、リアルな場だからこそ、「うちの子に合う」に気づかせるはず。赤ちゃんのびのび育つ毎日のために今日からできること、見つけませんか？

赤ちゃんとのつとめ、わかりあえる時間を手ぶらで参加いただけます

はじめて子育て 応援講座

10:30-11:30
子育て応援ひろば

赤ちゃんと一緒に笑顔におむつやお着替えも完備。フリードリンクあり。同じ内容を3回開催するので、ご都合の良い日をお選びください。申し込みは10:00~14:00の間。参加費もみひびきません。

各回 10組

「赤ちゃんと一緒に」がらまぐさる講座
「ママの悩み」を解決する講座

9月18日(木)
10月2日(木)
12月4日(木)

10月24日(金)
11月27日(木)
12月12日(金)

生後2か月〜5か月の赤ちゃんママ妊婦さん

無料 (内閣府モデル調査事業のため)

認定NPO法人 マミーズ・ネット
上越市中田原1 / 025-526-1099





乳児期の親子の絆を支える 子育て支援者のためのマザリーズ講座

赤ちゃんと保護者のコミュニケーションのとり方が気になることはありませんか？発達心理学の研究やマザリーズの実践で日本を代表する先生方をお招きし、赤ちゃんを保護者をつなぐ子育て支援者としての関わりを考えます。子育て支援の現場を見つめ直す機会としてぜひご活用ください。

「マザリーズ」とは

- 赤ちゃんへの語りかけ
- 情緒を安定させる効果
- 言葉の発達を促す働き
- 親子の愛着を深める等

講師

- 内山 伊知郎さん (オンライン登壇) 同志社大学心理学部 教授
- 児玉 珠美さん 元慶応義塾大学幼児教育学科 教授
- 嶋田 ひろみさん 愛知教育大学教育学部 非常勤講師

対象 子育て支援や保育に携わる方
子育て支援に関心のある方

会場 上越市市民プラザ 第2会議室

持物 赤ちゃん絵本1冊 (マザリーズの実践を行うため)

申込締切 10月10日(金) 正午

主催 認定NPO法人 マミーズ・ネット
025-526-1099 / 070-6562-6672
info@mammies.jp 上越市中田原1
後援 上越市

10/14 火
13:30 - 15:30

受講料 無料 定員 40名 (先着順)

子育て支援者向け研修会 妊産婦の孤立・孤独を防ぐ 支援力アップ 研修会

生活の変化や人との関わり方の減少から、子育て期間の、特に母親は孤立に陥りやすくなります。その際、小さなサインに気づき寄り添える支援者が地域に存在することは大きな支えとなります。本研修では、妊産婦の孤立・孤独の背景を理解し、ピアサポートで「つながり」を生む方法を学びます。

講師 倉石 哲也 さん
武蔵川女子大学心理・社会福祉学部 社会福祉学科 教授 学部長

2025 11月25日 火
14:00~16:00 (受付13:40~)

会場：上越市市民プラザ第2会議室
対象：子育て支援・保育に携わる人
関心のある人

内閣府モデル調査事業

主催：認定NPO法人 マミーズ・ネット 後援：上越市
025-526-1099 / 070-6562-6672
info@mammies.jp

お申込はこちら
右のQRコードから
11月14日(土)まで
お申し込みください

